

# 看護系短期大学学生祭で開催される『地域交流事業』に 精神障がい者が参加する意義

## SIGNIFICANCE OF INDIVIDUALS WITH MENTAL ILLNESS PARTICIPATING IN “COMMUNITY EXCHANGE PROGRAM” AT A NURSING JUNIOR COLLEGE STUDENT’S FESTIVAL

阿部 幹佳 ・ 二口 尚美

ABE Mikika,

FUTAKUCHI Hisami

キーワード：精神障がい者、大学祭、意義、看護学科

Key Words : People with mentally disabled, Student’s festival, Significance, Department of Nursing

### 要 旨

本研究の目的は、精神障がい者が大学祭で開催される地域交流事業に参加し、大学生や地域住民と交流することの意義を、精神障がい者と日常的に関わっている事業所職員の双方の視点から明らかにすることである。A短期大学大学祭に2回以上参加した2事業所の3名の利用者と2名の職員を対象とし、半構造的インタビュー調査を実施し、質的記述的方法を用いて帰納的に分析した。その結果、利用者、職員に共通して【大学祭を楽しむ】、【大学に足を踏み入れる】、【たくさん売れる】、【普段と異なる場で売る】、【知らない人に売る】、【学生と関わる】、【他事業所・利用者を知る】7カテゴリーが抽出された。加えて利用者は大学祭を社会に出る機会と位置付け、障がい理解を希望していた。職員は大学祭でも利用者を支援しながら、商品を売り上げ利用者に還元する機会としていた。以上より、大学祭に精神障がい者が参加することは、共生社会の醸成の第一歩となり得る。

### Abstract

The purpose of this study is to clarify the significance of individuals with mental illness participating in community exchange projects that take place during university festivals and interacting with university students and residents, from the perspective of both individuals with mental illness and facility’s workers who have regularly involved them to their programs daily. Semi-structured interview

surveys were conducted on three individuals with mentally disabled and two workers from two each facility that had participated previously in the college student's festival at a Junior College A at least twice, and the results were analyzed inductively using the qualitative descriptive method. As a result, the following seven categories, across both users and workers, were extracted: enjoying the college festival, stepping into the college, ability to sell their more products, selling at a different place than usual, selling to strangers, interacting with young students, and learning about other facilities and users. Additionally, the college student's festival appraised by the mentally disabled individuals as an opportunity to appear in the society and offering the understanding of their disability. Facilities workers, supporting the individuals during the collage festival, considered this participation as an opportunity to sell products and give back to the users. Based on the results, the participation of individuals with mental illness at college festivals could become the initial steps to fostering an inclusive society.

## 緒 言

本邦では、平成16年に厚生労働省から「精神保健医療福祉の改革ビジョン」が提示された後、精神障がい者に対し入院治療中心から地域生活移行に向けた施策が展開されている。精神障がい者数推計によると、平成20年の約323.3万人から平成29年には約389.1万人へと約65.8万人増加しているものの、入院患者数では平成20年の約33.3万人から平成29年には約30.2万人と3.1万人減少しており、地域で生活をする精神障がい者が増加している（内閣府〔1〕、内閣府〔2〕）。

精神障がい者の地域生活をより推進していくためには、精神保健医療福祉施策の一層の充実が不可欠であるが一方で地域社会の理解も必要になる。精神障がい者や精神保健福祉に対する住民の思いには、周囲の人々が理解し見守る、障がい者を分け隔てず関わり合うという肯定的な思いと、精神疾患は病気としての理解が難しい、身の危険への不安を感じるという否定的な思いとの相反構造が見られたとの報告がある（板山 他〔3〕）。さらに、地域住民が精神障がい者と共生するために居住地域や自身に何が不足しているかを質的に明らかにした調査では、「精神障がい者と地域住民とのコミュニケーション」や「他人への関心」などが居住地域と自身に共通して挙げられている（千葉 他〔4〕）。これらの研究から地域住民が精神障がい者への理解に対して必要性を持つ一方

で、実際の交流の機会が十分ではないことが考えられる。

さらに本邦政府は、多くの国民が障がいの有無にかかわらず、互いに人格と個性を尊重しあい、理解しながら共に生きていく共生社会の実現を目指している（内閣府〔5〕）。共生社会とは、すべての国民が障がいの有無にかかわらず、互いに人格と個性を尊重しあい、理解しながら共に生きていく社会のことである。この共生社会の実現のためには、障がいがあってもその人らしく生きることが出来る地域づくりが求められると考えられる。

以上のことを鑑み研究者らは、学生や地域住民が障がい者への理解を深めることと精神障がい者の社会参加・活動の推進を目的として、所属短期大学大学祭（以下、大学祭とする）において『地域交流事業』に取り組んできた。地域交流事業は、看護学科開講科目である精神看護学実習施設等に案内をし、大学祭で、障がい福祉サービス事業所の利用者である精神障がい者と事業所職員が、看護学科学生ボランティアや看護学科教員らとともに、事業所での授産品（軽食や手工芸品）を地域住民である来場者や本学学生に販売、さらに学生ボランティアが、利用者に短大内を案内するものであった。大学祭後には、参加した利用者や職員から「有意義な体験だった。障がい者はなかなか大学に出向く機会はない。」という言葉が度々耳にした。

本邦における障がいを持たない者と精神障がい者との交流に関する先行研究では、交流体験により障がいを持たない者の障がい者に対する意識が肯定的に変化すると報告が見られる（阿部 他 [6], 中村 他 [7]）が、精神障がい者の側からの意識の変化についてはほとんど検討されていない。その理由として、一般的に精神障がい者は、新しいことや人に対し不安が強く、緊張しやすいという特徴を持つため、障がい者側からの意見を汲み取ることの困難さが関係している可能性が考えられた。しかし精神障がい者側からの意見を把握することは、研究者らが大学祭で取り組んできた『地域交流事業』の目的である、地域住民や学生との交流の場になり得ているかを振り返ることができると考えた。人に対し不安が強く意見を把握することが難しいことに対しては、障がい者が利用する事業所職員の視点を含めることにより、精神障がい者の真意を汲み取ることを補うことができると考えた。

本研究への取り組みは、今後の事業の継続と所属短期大学の共生社会の実現に向けた地域貢献についての示唆を得られると考えられた。

## I. 研究目的

本研究では、精神障がい者が大学祭に参加し、大学生や地域住民と交流することの意義を、精神障がい者（利用者）と精神障がい者と日常的に関わっている事業所職員の双方の視点から明らかにすることを目的とする。

## II. 学生祭で開催した『地域交流事業』の概要

### 1. 事業概要

障がい福祉サービス事業所の利用者である精神障がい者と、学生や大学祭の参加者（地域住民）の交流のために、事業所に大学祭への参加と授産品の販売を促した。本事業の目的は、①地域で暮らす障がい者の活動を推進することとなり地域貢献の一助となる、②障がい者との交流を通して学生が障がい者の生活や社会参加、活動について一層の理解を深めることができる、であった。事業

所の大学祭への参加は平成 29 年度から 3 年間継続した。

### 2. 参加者の募集

- 1) 障がい福祉サービス事業所への大学祭への参加の促し：研究者らとつながりがある短期大学近隣もしくは精神看護学実習事業所に参加を呼びかけた。加えて宮城県精神保健福祉協会に事業の PR を依頼した。
- 2) 学生ボランティアの募集：精神看護学関係の授業や実習で希望者を募り、趣旨を説明し協力を得た。

### 3. 事業内容（図 1）

キャンパス内のラウンジに販売スペースと喫茶スペースを作った。研究者らは短期大学より助成を受け、カフェ運営用の飲み物や装飾品、軽食販売に必要な物品を購入した。

- 1) 軽食販売：事業所単位で障がい者と事業所職員および学生ボランティアが担当
- 2) カフェ運営：学生ボランティアおよび研究者らボランティア教員担当
- 3) 短大内の案内：学生ボランティア担当

### 4. 参加事業者数・学生数（表 1）

参加事業者数は経年で 3 事業所から 7 事業所に増加した。3 年連続して参加した事業所は 2 か所であり、それらは精神看護学実習施設であった。授産品のみの委託販売を依頼した参加事業所もあった。ボランティア学生数については表 1 のとおりであった。

## III. 研究方法

### 1. 研究参加事業所・対象者

令和元年度大学祭に参加し、かつ以前にも 1 回以上大学祭に参加した 3 事業所の管理者に研究の趣旨を説明し、研究参加への同意を得られた 2 事業所の利用者と職員を対象とした。事業所は障がい者総合支援法に基づき設置された障がい福祉

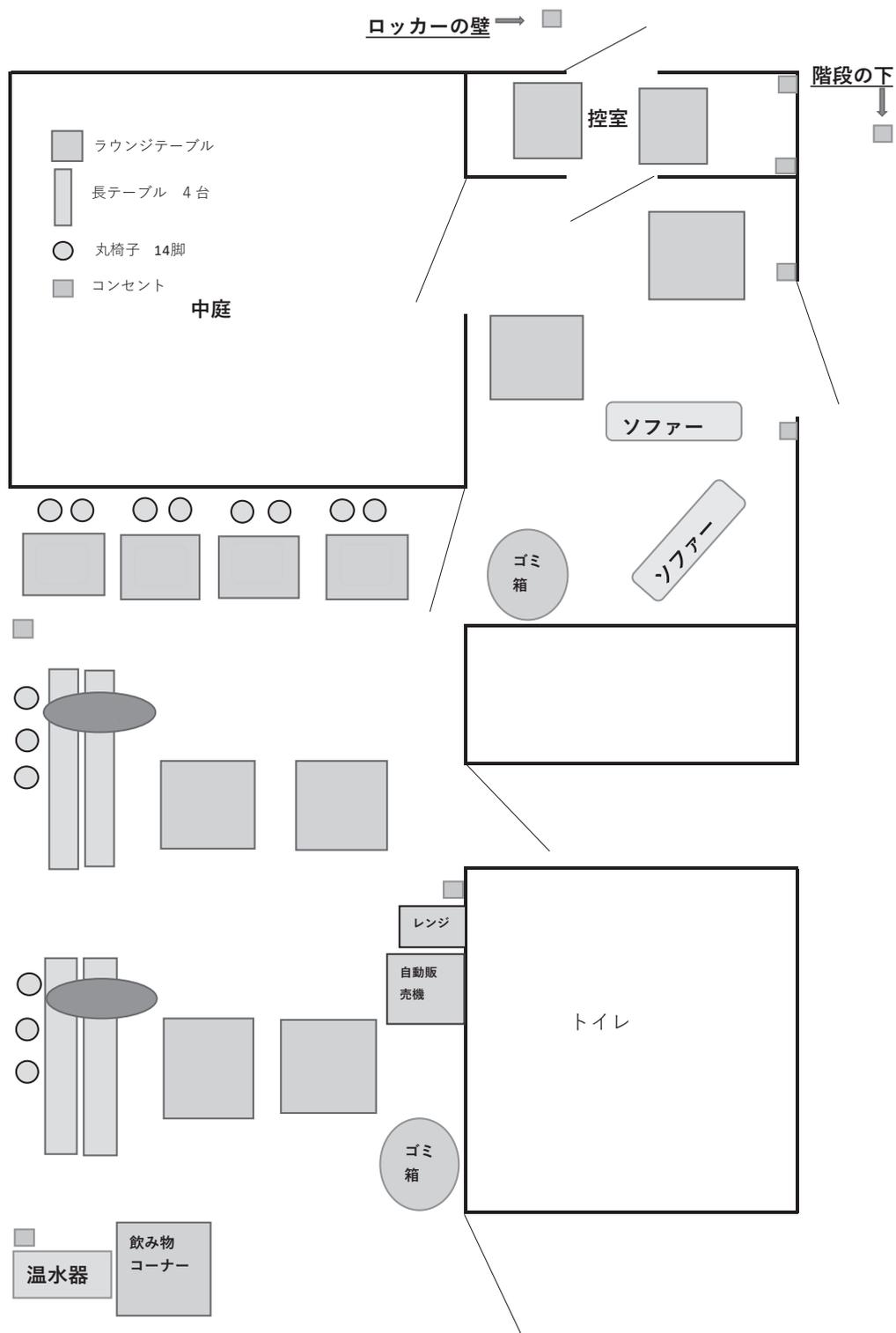


図1. ある年の「地域交流事業」レイアウト

表1. 大学祭への事業所・学生ボランティア参加概要

年度	参加事業所数	販売品	学生ボランティア数
平成29年度	3	食品	15名
平成30年度	5	食品・小物	8名
令和元年度	7	食品・小物	10名

サービス事業所である。障がい福祉サービス事業所は障がい者が自立した日常生活を営むことができるような支援、また就労に向けた支援を行うものであるが、2事業所は就労継続支援B型（一般企業等での就労が困難な障害者に働く場を提供し、知識と技術の向上のために訓練する）事業所であり、精神看護学実習の実習施設であった。

参加者の除外基準として、事業所職員から見て研究協力により病状が大きく影響すると考えられる利用者は対象にしなかった。協力が得られた2事業所の管理者を通し利用者と職員から研究協力を募り、研究参加への同意を得られた職員2名、利用者3名の計5名を対象とした。

## 2. データ収集方法

データ収集期間は令和元年11月～12月だった。

インタビューは、研究者が事業所に出向き、プライバシーが確保できる個室を借りて行った。データ収集は基本属性に関する質問用紙と、インタビューガイドから構成される半構造化面接法で行った。インタビューデータの信頼性を確保するために全てのインタビューは研究者1名のみが行った。さらにインタビューにおける潜在的バイアスを排除するため、研究者らは『地域交流事業』の継続を意図した研究ではないことを自覚した上で、対象者から大学祭への参加に関するネガティブな情報も得られるインタビューガイドを複数の研究者で作成した。利用者へのインタビュー内容は、①大学祭に参加したきっかけ、②大学祭に参加して良かったこと、③大学祭に参加して残念だったこと、④大学祭に今後も参加したいかとその理由であった。職員へのインタビュー内容は、①大学祭に参加したきっかけ、②大学祭にはどのような利用者に参加してもらったか、③大学祭に参加して利用者や事業所にとって良かったこと、④大学祭に参加して利用者や事業所にとって残念だったこと、⑤大学祭に今後も参加したいかとその理由であった。インタビューの過程では大学祭への参加に関するポジティブな意見が多く語られたため、研究者はネガティブな意見に対する質問

を何度か繰り返すことを意識した。1回の面接時間は利用者が19分～22分、職員が29分～41分であった。面接内容は対象者の理解を得た上で録音をした。録音をした内容をもとに逐語録を作成した。

## 3. データ分析方法

本研究では質的記述的方法を用いて帰納的に分析した。質的記述的方法とは、記述された現象を理解することを目的とした質的研究の一方法であり、データを質的な内容分析によって縮小化し、カテゴリー化されたデータを表示してデータを解釈する方法である（グレッグ 他[8]）。本研究では以下の手順に沿って分析を行った。①作成した逐語録を事業所ごとに利用者・職員のものを精読した。②次に利用者ごとの逐語録、職員ごとの逐語録を熟読した。③逐語録に記述された言葉を用いて内容ごとにまとめコードとし、このコードを共通点、相違点について比較しながら分類した。④分類されたものに共通する名前を付けてサブカテゴリーとし、次にサブカテゴリーの分類を行いカテゴリーとし概念の抽象度をあげていった。⑤生成されたカテゴリーを比較・対照し、カテゴリーの関連を表示した。分析の妥当性を確保するために研究者2名がディスカッションしながら行った。

## 4. 倫理的配慮

インタビュー前に利用者・職員にインタビューガイドを提示し語れることのみ話してもらうよう説明した。特に利用者の病状が不安定になった時にはいつでも中止できるように対象者の様子を観察しながらインタビューを進めた。インタビュー後、必要時には研究者が事業所に訪問するなどフォローできる体制の下で行った。

個人情報の取扱いに関しては、データは鍵のかかる場所で保管し、逐語録にする場合は個人を特定できないように記号化した。

なお本研究は、仙台青葉学院短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号0106）。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 対象者の属性

利用者は3名、男性2名、女性1名、40歳代1名、50歳代1名、70歳代1名であり、3名の事業所平均通所歴は7年であった。

職員は2名、男性1名、女性1名、40歳代2名であり、障がい福祉サービス事業所における平均勤務歴7.5年、所属事業所平均勤務歴は7年であった。

#### 2. 逐語録のカテゴリー分類

利用者、職員ごとに語られた内容について意味単位で区分した結果、利用者では74の語り、職員では102の語り抽出された。類似性、相違性を検討しながら分類を繰り返した結果、利用者では14のカテゴリー、職員では30のカテゴリーが形成された。利用者と職員のカテゴリーでは7カテゴリーに重複が見られたため、それらをさらに検討した結果、13のサブカテゴリーが形成された。重複したカテゴリーを除いたものを、利用者、職員別に整理した。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》、語りの例を「 」で示す。

##### 1) 利用者、職員に共通するカテゴリー (表2)

【大学祭を楽しむ】では、《大学祭のイベントを回る》、《大学祭の雰囲気が楽しい》があり、地域交流事業への参加だけでなく、利用者も職員も大学祭そのものを楽しんでいた。「販売だけでなく、大学祭のビンゴにだったりに参加して、普段はなかなか見れないものを見て、一緒に経験させてもらって、その時の表情がすごくよくなって (職員)。」。

【大学に足を踏み入れる】では、《普段大学の中に入ったことがない》があり、利用者も職員もこれまで大学という場に入る機会がなく、そのことがよい経験であると感じていた。「大学の中に入るといことがなかったので経験させてもらいました (利用者)。」。

【他事業所・利用者を知る】では、《他事業所の

利用者と関わる》、《他事業所の商品を知る》があり、地域交流事業の目的の通り、他事業所や他事業所利用者を知り、関わるという交流機会となっていた。「利用者さん同士は、買って、買って来てみたいなのはちょっとあって、そのときの言葉のやり取りはありますけど。(中略)。隣のとかはね、買って食べたりっていうのはありましたけど (職員)。」。

【たくさん商品が売れる】では、《学生とともに宣伝し売れる》、《1日での売上額が大きい》があり、地域交流事業という機会に、学生の協力を得つつ、事業所の商品を普段以上に販売していた。「『こういう商品ありますよ』と学生と宣伝をして回ると、また売れるのが面白いと思いました。売り上げを上げようという気持ちが大きかったです (利用者)。」。

【普段と異なる場で売る】では、《事業所ではない場での販売》、《障がい者が事業所外に行く意義がある》があった。大学というひとつの地域社会に出向き、普段事業所の作業である販売をすることが利用者の行動範囲拡大につながっていた。「外に販売に出掛けていくっていうのも大切な活動の一つなのですが、純粹に利用者さんに施設以外の場所や、障がいに対していろんな考えを持った人がいる場所に行くのも意義があるというのがあります (職員)。」。

【知らない人に販売する】では、《知らない客に販売して感じる》、《普段は顔なじみの客と接する》があった。大学祭の地域交流事業への参加は、普段の事業所での販売とは異なり、知らない人に接する対人関係が拡大する体験となっていた。「大学だといつも会わない人がお客さんが来て足を止めて見てくれるというのは素晴らしい。うれしい。(利用者)。」。

【普段関わる機会がない若い学生と関わる】では、《若い学生の反応を楽しむ》、《若い学生と話ができる》があった。壮年期や老年期の利用者たちにとって、普段接することが少ない若者である学生に接し、感じることや会話をする対人関係拡大の機会となっていた。「若い子とお話しすると

表2. 利用者・職員に共通の大学祭への参加意義

意義	カテゴリー	サブカテゴリー	語りの例
余暇	大学祭を楽しむ	大学祭のイベントを回る	利用者：大学祭で、学生とお祭りを見たりして自分でも面白いと思いました。 職員：販売だけでなく、大学祭のビンゴだったりに参加して、普段はなかなか見れないものを見て、一緒に経験させてもらって、そのときの表情がすごくよくなって。
		大学祭の雰囲気が楽しい	利用者：音楽も外で流れてたと思うし。あとは何かステージの方で何かやってたかもしれない。若い人がね（中略）とても楽しかったしうれしかったよ。 職員：事業所の中でビンゴするのはまた違うじゃないですか。そういった雰囲気の中で、大学の若い人たちの乗りのようなことも経験したことが、私は去年、印象的でした。
機会	大学に足を踏み入れる	普段大学中に入ったことがない	利用者：大学の中に入ることがなかったので経験させてもらいました。 職員：私たち職員も利用者も、なかなか短大に行く機会がなかったので、そういうところに行く機会を経験したい、して欲しいというところがありました。
		他事業所の利用者に関わる	利用者：外に出て自分の目で見ないと分からない。「障がい者同士、われわれももっと頑張らなくては」という気持ちももらえるです。「こういう人たちも一生懸命なんだ」と思うとね。 職員：利用者さん同士は、買って、買って来てみたいのはちょっとあって、そのときの言葉のやり取りはありますけど。（中略）。隣のとかはね、買って食べたりっていうのはありましたけど。
	他事業所の商品を知る	職員：「こんなの売ってるね」。特に職員なんかが。見て「えー、こんなの作ってるんだ、すごいね」って言って。ちょっと値段もちらって見て、「これぐらいだね」みたいなのは、すごくありますし。	
利用者職員に共通	販売	たくさん商品が売れる	利用者：「こういう商品ありますよ」と学生と宣伝して回ると、また売れるのが面白いと思いました。売り上げを上げようという気持ちが大きかったです。
		1日での売上額が大きい	職員：1日だけで、ある程度の売り上げを見込めるというのもありがたいという感じです。
活動範囲拡大	普段と異なる場で売る	事業所ではない場での販売	利用者：事業所でのイベントに参加して、販売をしているので、いつもやっていることを、また違うところでやってみたいと思った。
		障がい者が事業所外に行く意義がある	職員：外に販売に出掛けていくっていうのも大切な活動の一つなのですが、純粋に利用者さんに事業所以外の場所や、障がいに対しての考えを持った人がいる場所に行くのも意義があるというのがあります。
対人関係拡大	知らない人に売る	知らない客に販売して感じる	利用者：大学だといつも会わないお客さんが来て足を止めて見てくれるというのは素晴らしい。うれしい。 職員：それとは違う場所とか、人とかと接してもらおう。それで刺激を受けて、その後気持ちの面や、今までよりも少しやる気が向上したということがある。
		普段は顔なじみの客と接する	利用者：事業所にも色々なお客さんが来てくれて、顔なじみになる人もいられるけども。ふだん来てくれるお客さんは大体知っている人が多い。 職員：事業所だと、利用者の入れ替わりや新しいお客さんが来ることもありますが、ある程度固定されたお客さんや、利用者さん同士でのやり取りになってしまうという日々になるんです。
	若い学生と関わる	若い学生の反応を楽しむ	利用者：事業所に実習にきた学生が買いに来てくれたりとかが楽しいです。商品をたくさん買ってくれたり、ありますんで。 職員：若い学生さんと話せて、その考えや現代の若者の反応も、逆に楽しんでいたようです。
若い学生と話ができる		利用者：若い子とお話しするとね、「だって、おいしいんだもの。もっと食べる？」なんて、ああいう姿見たら、「ああ、うれしいな」と思うね。 職員：利用者は、学生のような年代の人に声を掛けられる経験はほとんどない。	

ね、「だって、おいしいんだもの。もっと食べる？」なんて、ああいう姿見たら、「ああ、うれしいな」と思うね。（利用者）。」。

## 2) 利用者のカテゴリー（表3）

利用者と職員に共通するカテゴリーの他に、7つのカテゴリーが挙げられた。

【職員から誘われ気軽に参加する】からは、利用者が普段事業所で接している職員から大学祭に誘われ、構えることなく大学祭に参加したこと、

職員から誘われたことが大学祭参加へのきっかけとなったと理解できた。「最初は「まあ、行ってみるか」ぐらいな簡単な感じだった。簡単な気持ちで行ってみた。」。

【社会に出ることで自分を知ることができる】からは、事業所の外に出て大学祭に参加することで事業所の外にある社会の広さを知ることができ、自分自身に気付くことができるという考えが伝わってきた。「みんな外に出て、大きく外を見

ることが、私たち障がい者は必要だと思う。事業所に来て「こんだけやったから、いい」でなくて、やっぱり大きな器がさ。そうすると、自分に気付くしね。」。

【大学祭をきっかけに事業所利用者に気づく・関わる】では、事業所の外での販売を通して、同じ事業所の利用者の変化に気が付いたり、事業所の外での体験を同じ事業所の大学祭に参加しなかった利用者に伝えるという機会となっていたと理解できた。「去年の大学祭のビンゴがすごかった。事業所で、その時の写真をたくさん貼って、楽しかった思いを他の利用者に伝えた。」。

【職員に大学祭に誘われ利用者が自身の力を感じる】では、職員に大学祭への参加を誘われたことが普段の利用者の販売経験を認めてくれていると利用者が捉えていた。「前の仕事がサービス業だった。お客様と対応するのが人よりうまいっていうことで行くようになったと思います。自分としては声をかけられて嫌ではありませんでした。」。

【事業所や精神障がい者を理解して欲しい】は、利用者が精神障がい者に対する理解を求めて大学祭に参加していると解釈できた。「遠い短大にわざわざ行くのは、地域のイベントを通して事業所

と短大とのつながり、交流というか、地域の交流を通して事業所を知ってもらいたいです。大学祭だけでなく、他のイベントにも参加しています。」。

【普段よりもより大きな社会で販売する】は、事業所を出て事業所の一員として責任を持ち販売をすることへの誇りを感じ、大学祭への参加が活動範囲拡大の機会となっていると理解できる。「大学祭では、事業所の看板というか、そういう看板を背負って販売しています。」。

【参加するには利用者だけでは難しい】は、大学祭に参加したいと思っても、利用者個人で参加するにはハードルを感じており、参加への条件があると利用者を感じていたと理解できる。「大学祭に「参加しませんか」と言われないと、一人でお祭りを楽しむことはなかなかできない。誰でも参加できるとはなっているけれども、きっかけがないと難しい。知らないところに入っていきなでできない。」。

### 3) 職員の 카테고리 (表4)

利用者職員に共通するカテゴリーの他に、14のカテゴリーが挙げられた。

【実習を引き受けている短大の教員から誘われ参加する】からは、精神看護学実習でのつながりがある教員からの直接的な参加の誘いが、大学祭

表3. 利用者の大学祭への参加意義

意義	カテゴリー	語りの例
機会	職員から誘われ気軽に参加する	大学祭に参加したきっかけは、「あるよ」と職員に言われたからです。最初は「まあ、行ってみるか」ぐらいな簡単な感じだった。簡単な気持ちで行ってみた。
	社会に出ることで自分を知ることができる	みんな外に出て、大きく外を見ることが、私たち障がい者は必要だと思う。事業所に来て「こんだけやったから、いい」でなくて、やっぱり大きな器がさ。そうすると、自分に気付くしね。
	大学祭をきっかけに事業所利用者に気づく・関わる	お店で見てるいつもの仲間の姿と、大学祭に一步出た人間とは全然違った。去年の大学祭のビンゴがすごかった。事業所で、その時の写真をたくさん貼って、楽しかった思いを他の利用者に伝えた。
利用者	自尊心 職員に大学祭に誘われ利用者が自身の力を感じる	前の仕事がサービス業だった。お客様と対応するのが人よりうまいっていうことで行くようになったと思います。自分としては声をかけられて嫌ではありませんでした。
	希望 事業所や精神障がい者を理解して欲しい	遠い短大にわざわざ行くのは、地域のイベントを通して事業所と短大とのつながり、交流というか、地域の交流を通して事業所を知ってもらいたいです。大学祭だけでなく、他のイベントにも参加しています。自分の障がいのことや生活のことを分かってほしいと思います。誰かに聞かれても嫌ではないです。分かってくれそうな人に話します。
活動範囲拡大	普段よりもより大きな社会で販売する	大学祭では、事業所の看板というか、そういう看板を背負って販売しています。だから短大祭は事業所より、さらに広い社会でとてもいい経験でした。
参加条件	参加するには利用者だけでは難しい	去年は、職員が送り迎えをすることができなくて参加できなかった。大学祭に「参加しませんか」と言われないと、一人でお祭りを楽しむことはなかなかできない。誰でも参加できるとはなっているけれども、きっかけがないと難しい。知らないところに入っていきなでできない。

表4. 職員（事業所）の大学祭への参加意義

意義	カテゴリー	語りの例
機会	実習を引き受けている短大の教員から誘われ参加する	大学祭に誘っていただくというのも、正直、他ではあまりないですし。地区の祭では、参加条件みたいな文書だけが来て、そこに参加するのは、事業所側から申し込み形になる。大学祭に参加したきっかけは、学校から声をかけていただきました。
	他事業所を職員が知る	大学祭に参加していたほかの事業所の売ってる物の値段が非常に安かったの、「いやあ、そっちに行っちゃうよね」と思ったけれども、そうでもなかった。
職員	大学祭への参加を利用者に職員から促す	ただ基本的には自由参加なので「こういったのがあります」「でも、販売活動に参加しないで、そのまま来てもらうってことでも大丈夫です」と純粋な大学祭の宣伝というアナウンスだけしました。大学祭への参加には職員がやる気を出したり音頭を取る必要はある。
	事業所サービスの一つとして大学祭に利用者が参加する	大学祭での利用者の作業は、販売訓練も兼ねるということで「福祉サービスを利用した」ということにしています。きっかけは事業所からの案内なので事業所の活動の場にいらっちゃった、参加という扱いはさせてもらっています。
	参加者同士の間関係も考慮する	そして利用者同士のその組み合わせも一応、考慮しました。毎年出る利用者の入れ替わりがあるので検討する内容が違いますけどね。
	利用者に良い影響がある	事業所としても「ふだんからこういうことを目指してるんだよ」というところで、利用者の意識が少し変わってくれることもありえる。新しい世界ではないですが、そこに入れるというのは、利用者にとっては非常にいいし。
	普通の販売以上に売れ利用者の作業意欲につながる	事業所よりもたくさん物が1日で売れるから、それに喜びを見出してくれたりします、達成感的な。(中略)利用者は「ちょっと予想してたのと違って売れるんですね。自分の予想、ちょっと甘かったです」というんです。「いっぱい売れると気持ちいいね」などもあります。大学祭に出すと、買っていただけなので。事業所に戻って小物を作ってる利用者に「売れたよ」と言うと、「また作らなきゃ」励みになります、本当に。なかなかないのでね、やっぱり売れる機会ってというのは。
	他事業所の利用者を感じ取る	今年は利用者の中には他の事業所の利用者に対して「せっかく大学祭に来たんだから、もっと売る努力をした方が良い」、「若い人たちもいっぱい来てるし」といった気持ちが、もしかしたらあったのかもしれない。
	希望した利用者が大学祭に参加する	大学祭に参加している利用者は、基本は参加したい人です。事業所の看板を背負ってもいますけど。本当に参加したい人は、もうみんなって感じで。みんな初めてだし、「行ってみよう」という感じで。
	普通の事業所と異なるため参加できない利用者もいる	今年が少なかったのは外での販売ということに抵抗ある人もいますし。あとは長時間というところで、体力的に難しいというのが、多分一番多いかなと思います。あとはそういうところに行くことにも、ちょっと不安だったりって方も、もちろんいますし。知らないところに行くことは「どんな感じだろう」とわくわくするだけではなく、不安になるって方も多いので。
	販売時間が長く終日参加が難しい利用者がある	やっぱりあの時間の長さは、結構いるのはきつと思うので。立って販売する時間と、ちょっと中を楽しむ時間を取って、帰ったのは13時。3時間ちょっとって感じですか。
	販売の戦力になる利用者に参加を促す	多分このぐらいのスピードで料理を出すとなったら、職員プラスその利用者さんも参加してもらって組み立てた方が、スムーズに営業できたり、トラブルなくお金の受け渡しできたりするだろうなという。それはもう作業での、利用者の力を、ちょっと当てにしています。
他販売イベントに比べて金銭負担が少ない	区や市主催の公園では出店料や手数料が「なし」なので、大学祭でもそういうのがなかったのが参加させていたでいる。	
販売	大学祭での販売で利益を上げ利用者に還元する	加えて残念というほど影響はありませんでしたが、学生の出店の値段設定がやはり安いので、そこと比べると、事業所で出した商品は高かった。でも、適正な価格で売らないと利用者に還元出来ないの。大学生では販売値段における材料費の割合は普段の販売と同じくらいです。
	売る場所となっている	小物はふだん作っているものですが、なかなか売れる場所が、今なかったの。裁縫は常に作っている物ですが売るのがイベントとしか、今なくてですね、事業所内で販売してるといっても、誰か来るってわけではないの。
	若い客から商品の感想を聞くことができる	今年もそうですけど、みんな買ってもらったときに、自分たちの商品のこととかを、若い人たちがね、いろいろこう言うってくれるっていう、それを聞ける機会でもあるなと思いましたね。
	食品の販売条件が揃っていた	クーラーボックスに冷凍のものを入れるのは、マイナス18度以下にはなってない。昔だったら、少しは大目に見てくれたのですが、参加条件として企業などと同じことを求められる。大学祭では、電源があったのでそのあたりがクリアできたということもある。
参加条件	大学祭での販売は予想できないこともある	逆にこっちの準備不足が、今年はいろいろあった。お客さんが多かったの、ふだんの販売よりもお釣りが「足りなくなるね」というのがありました。
	大学祭に参加する条件が揃っている	大学祭は手作り感があるので、販売場所が融通していただいたり配慮していただいたりしているのも、非常に助かります。こういっただころがやっぱり、参加しやすい、いい面ですかね。
	大学祭参加への職員の負担が大きすぎない	大学祭は1日だけ、職員が2名参加だったので、振り替え休暇を取れば休日出勤扱いにする必要もない。職員のこのような面でも負担にならずに参加させてもらえた。1日だけで済んで、しかも職員数も2人でよいという条件が整えられた。これが準備物やもっと大きな準備が必要になると、職員ももう少し必要になるので難しくなる。
希望	職員が参加可能な条件であった	うちの事業所では加工しないと販売できないので大学祭に参加するにはやはり職員は必要になる。利用者には職員だけでは賄いきれない部分に参加してもらっている。販売の戦力になるということもある。
	学生が利用者との関わりに積極的に参加する	今年は去年、おととしに比べると、うちと他の事業所に、実際に実習に行った学生が立ち寄りたりっていうのが少なかったと思います。今年は学生の関わりが少なかったと感じました。大学祭での販売の場がどういう感じなんだろうなというのは、すごく思ったんです。交流カフェじゃないですか。

への参加のきっかけとなったと理解できる。「大学祭に誘っていただくというのも、正直、他ではあまりないです。地区の祭では、参加条件みたいな文書だけが来て、そこに参加するのは、施設側から申し込む形になる。」。

【他事業所を職員が知る】からは、普段の事業所同士のつながりとは別に、大学祭という場で、販売する上での競争相手となる他事業所の姿勢について職員が知ったと理解できる。「大学祭に参加していたほかの施設の売ってる物の値段が非常に安かったので、「いやあ、そっちに行っちゃよね」と思ったけれども、そうでもなかった。」。

【大学祭への参加を利用者に職員から促す】からは、利用者のカテゴリと対応しているものであり、大学祭に誘われ多少の関心を持った事業所の職員からの案内があり、大学祭に参加できることを利用者が知ったということが理解できる。「大学祭への参加には職員がやる気を出したり音頭を取る必要はある。」。

【事業所サービスの一つとして大学祭に利用者が参加する】からは、大学祭の地域交流事業が事業所サービスの一形態と職員が捉えていると理解できる。「大学祭での利用者の作業は、販売訓練も兼ねるということで「福祉サービスを利用した」ということにしています。」。

【参加者同士の人間関係も考慮する】では、職員は自由参加であると利用者を誘っていた大学祭であったが、普段の利用者同士の関係性も考慮している、職員は大学祭の場でもいつも通りに利用者を支援していると理解できる。「そして利用者同士のその組み合わせも一応、考慮しました。」。

【利用者に良い影響がある】では、事業所が目指す姿を大学祭で利用者に実感してもらえる機会であると職員が考えていると理解できる。「事業所としても「普段からこういうことを目指してるんだよ」というところで、利用者の意識が少し変わってくれることもありえる。」。

【普段の販売以上に売れ利用者の作業意欲につながる】では、事業所で製作されたものが大学祭で普段以上に売れたことが、大学祭に参加しな

かった事業所の利用者にとっても、日々の製作の励みになり、参加しなかった利用者にも大学祭への事業所の参加は影響すると理解できた。「大学祭に出すと、買っていただけるので。事業所に戻って小物を作ってる利用者に「売れたよ」と言うと、「また作らなきゃ」励みになります、本当に。なかなかないのでね、やっぱり売れる機会っていうのは。」。

【他事業所の利用者を感じ取る】では、大学祭に参加した利用者が、他事業所の利用者の姿から感じ取る体験をしていたと理解できた。それは自分自身に他利用者の姿を重ねるところもあると考えられた。「今年は利用者の中には他の事業所の利用者に対して「せっかく大学祭に来たんだから、もっと売る努力をした方が良い」、「若い人たちもいっぱい来てるし」といった気持ちが、もしかしたらあったのかもしれない。」。

【希望した利用者が大学祭に参加する】では、職員の誘いがあっても利用者には大学祭への参加は希望者とし、事業所での支援同様に支持的に職員が利用者に関わっていると理解した。「大学祭に参加している利用者は、基本は参加したい人です。事業所の看板を背負っていてもいますけど。」。

【普段の事業所と異なるため参加できない利用者もいる】では、大学祭への参加を希望してもなおさまざまな条件により参加が難しい利用者があることを示している。職員は大学祭に参加するための利用者の状況を把握、何が起こりうるかも勘案しながら大学祭に参加していると考えられた。「今年が少なかったのは外での販売ということに抵抗ある人もいますし。あとは長時間というところで、体力的に難しいというのが、多分一番多いかなと思います。あとはそういうところに行くことにも、ちょっと不安だったりって方も、もちろんいますし。知らないところに行くことは「どんな感じだろう」とわくわくするだけけではなく、不安になるって方も多いので。」。

【販売時間が長く終日参加が難しい利用者がある】では、大学祭に実際に参加し利用者の状況に応じて、事業所に戻る利用者の送迎をしてる職員

がいることを示している。「あの時間の長さは、結構いるのはきついと思うので。立って販売する時間と、ちょっと中を楽しむ時間を取って、帰ったのは13時。3時間ちょっとって感じですか。」。

【販売の戦力になる利用者に参加を促す】からは、大学祭の参加は希望者としながらも、販売の戦力として期待できる利用者には個別に参加を促して販売をスムーズにできるように考えていた。「多分このぐらいのスピードで料理を出すとなったら、職員プラスその利用者さんも参加してもらって組み立てた方が、スムーズに営業できたり、トラブルなくお金の受け渡しできたりするだろうなという。それはもう作業での、利用者の力を、ちょっと当てにしています。」。

【他販売イベントに比べて金銭負担が少ない】では、大学祭では他の販売イベントよりも金銭負担が少ないために結果として販売効率が上がるイベントであると捉えられていた。「区や市主催の公園では出店料や手数料が「なし」なので、大学祭でもそういうのがなかったので参加させていただいている。」。

【大学祭での販売で利益を上げ利用者に還元する】では、学生の出店の安い値段に戸惑いながらも販売利益を利用者に還元するために普段同様に適正価格で売ったことが理解できる。「加えて残念というほど影響はありませんでしたが、学生の出店の値段設定がやはり安いので、そこと比べると、事業所を出した商品は高かった。でも、適正な価格で売らないと利用者に還元出来ないの。大学祭では販売値段における材料費の割合は普段の販売と同じくらいです。」。

【売る場所となっている】では、これまでは事業所で作成した小物を販売する場がなかったが、期せずして大学祭が販売する場となったと理解できる。「小物はふだん作っているものですが、なかなか売れる場所が、今なかったの。裁縫は常に作っている物ですが売るのがイベントとかしか、今なくてですね、事業所内で販売してるといっても、誰か来るっていうわけではないの。」。

【若い客から商品の感想を聞くことができる】

では、大学祭は物を販売するとともに、普段接することが少ない若い学生からの商品の感想を聞ける機会と理解できる。「今年もそうですけど、みんな買ってもらったときに、自分たちの商品のこととかを、若い人たちがね、いろいろとこう言ってくれるっていう、それを聞ける機会でもあるなと思いましたね。」。

【食品の販売条件が揃っていた】では、普段の販売イベントでは課題となる電源が確保でき、食品を最適な状態で販売することが出来たと理解できる。「クーラーボックスに冷凍のものを入れるのは、マイナス18度以下にはなってない。昔だったら、少しは大目に見てくれてたのですが、参加条件として企業などと同じことを求められる。大学祭では、電源があったのでそのあたりがクリアできたということもある。」。

【大学祭での販売は予想できないこともある】では、大学祭での販売を振り返り事業所の準備不足があったことを述べていると理解できる。「逆にこっちの準備不足が、今年はいろいろあった。お客さんが多かったの、ふだんの販売よりもお釣りが「足りなくなるね」というのがありました。」。

【大学祭に参加する条件が揃っている】では、普段の販売イベントでは主催者側が事業所個々の事情を考慮せず画一的に行われることと比べて配慮があることに参加しやすいと述べている。「大学祭は手作り感があるので、販売場所で融通していただいたり配慮していただいたりしているのも、非常に助かります。こういったところがやっぱり、参加しやすいし、いい面ですかね。」。

【大学祭参加への職員の負担が大きすぎない】では、大学祭の開催日程が1日のみであり職員の労務管理上の条件と整合したと述べている。「大学祭は1日だけ、職員が2名参加だったので、振り替え休暇を取れば休日出勤扱いにする必要もない。職員のこのような面でも負担にならずに参加させてもらえた。1日だけで済んで、しかも職員数も2人でよいという条件が整えられた。これが準備物やもっと大きな準備が必要になると、職員

ももう少し必要になるので難しくなる。』。

【職員が参加可能な条件であった】では、大学祭の参加には職員の参加が必要になるため職員の参加可能な条件であったことが参加理由であったと述べている。「うちの事業所では加工しないと販売できないので大学祭に参加するにはやはり職員は必要になる。利用者には職員だけでは賄いきれない部分に参加してもらっている。販売の戦力になるというのもある。』。

【学生が利用者との関わりに積極的ではない】では毎年大学祭に参加している事業所の職員は学生の精神障がい者に向かう姿勢について述べている。「今年は去年、おととしに比べると、うちと他の事業所に、実際に実習に行った学生が立ち寄りたりってのが少なかったと思います。』。

【大学祭は交流の場となって欲しい】では、地域交流事業であるが交流になっていないことへの嘆きである。「今年は学生の関わりが少なかったと感じました。大学祭での販売の場がどういう感じなんだろうなというのは、すごく思ったんです。交流カフェじゃないですか。』。

### 3. 利用者、職員の大学祭に参加し交流する意義の構造 (図2)

利用者と職員に共通した7つのカテゴリーを中心に、カテゴリーが示す大学祭への参加の意義を解釈し、利用者、職員の大学祭に参加し交流する意義の構造を図示した。

利用者、職員には【大学祭を楽しむ】という余暇活動となっていた。【大学に足を踏み入れる】、【他事業所、利用者を知る】機会でもある大学祭の中で【たくさん売れる】体験をしていた。【普段と異なる場で売る】体験は、利用者、職員の活動範囲拡大となり、【知らない人に売る】、【普段関わる機会がない若い学生と関わる】体験は、利用者、職員の対人関係拡大につながっていた。

大学祭の参加には、実習で関わっている短期大学教員からの職員への誘いがきっかけとなり、事業所職員は、大学祭への参加の一連で普段通りの【利用者への支援】を行いながらも、【職員が無理

なく、効率よく販売】していた。

利用者は【自分だけでは参加不可】と考え、事業所職員の支援があり【社会に出る機会】として大学祭に参加していた。その参加に対して利用者は【障害者や事業所の理解を希望】していた。

## IV. 考察

### 1. 大学祭で地域交流事業が目指したこと

地域交流事業は、短期大学の大学祭で実施され、障害福祉サービス事業所の利用者である精神障がい者と、学生や大学祭に参加する地域住民の交流を目指し、事業所に大学祭への参加と授産品の販売を促し、地域で暮らす障がい者の活動を推進するために行われた。短期大学の大学祭を社会参加の一つの場として活用する取り組みであった。精神障がい者の社会参加に関して、社会参加へのニーズとして働く場などの整備(北島[9])、短時間労働のできる場所の整備(服部 他[10])が報告されており、障害福祉サービス事業所の中でも非雇用型の福祉型就労を提供する就労B型事業所が近年増加している(厚生労働省[11])。事業所の利用者、職員に共通したカテゴリーに挙げたように、大学祭は就労B型事業所同様に非雇用型ではあるが【普段入る機会がない大学に足を踏み入れ】、【普段と異なる場で】【知らない人に販売する】といった、障がい者の活動を活動範囲、対人関係とも拡大する機会を提供していたと考えられる。

【知らない人に販売する】ことでの他者との交流の程度は不明であるが、販売することによるやりとり(客への声かけ、応対、金銭の授受、商品を渡す、お礼を述べる)といった行為のいずれかについて、職員の支援を受けながら行ったと推測できる。利用者も職員も【知らない人に販売する】ことで感じる体験をし、【若い学生と関わる】ことでも、その反応を楽しむなど活動だけでなく、ポジティブに感情が動く体験をしていた。

利用者も職員もともに、実習でつながりがあった短期大学教員からの誘いがきっかけとなり、【大学に足を踏み入れる】ことで【大学祭を楽しむ】

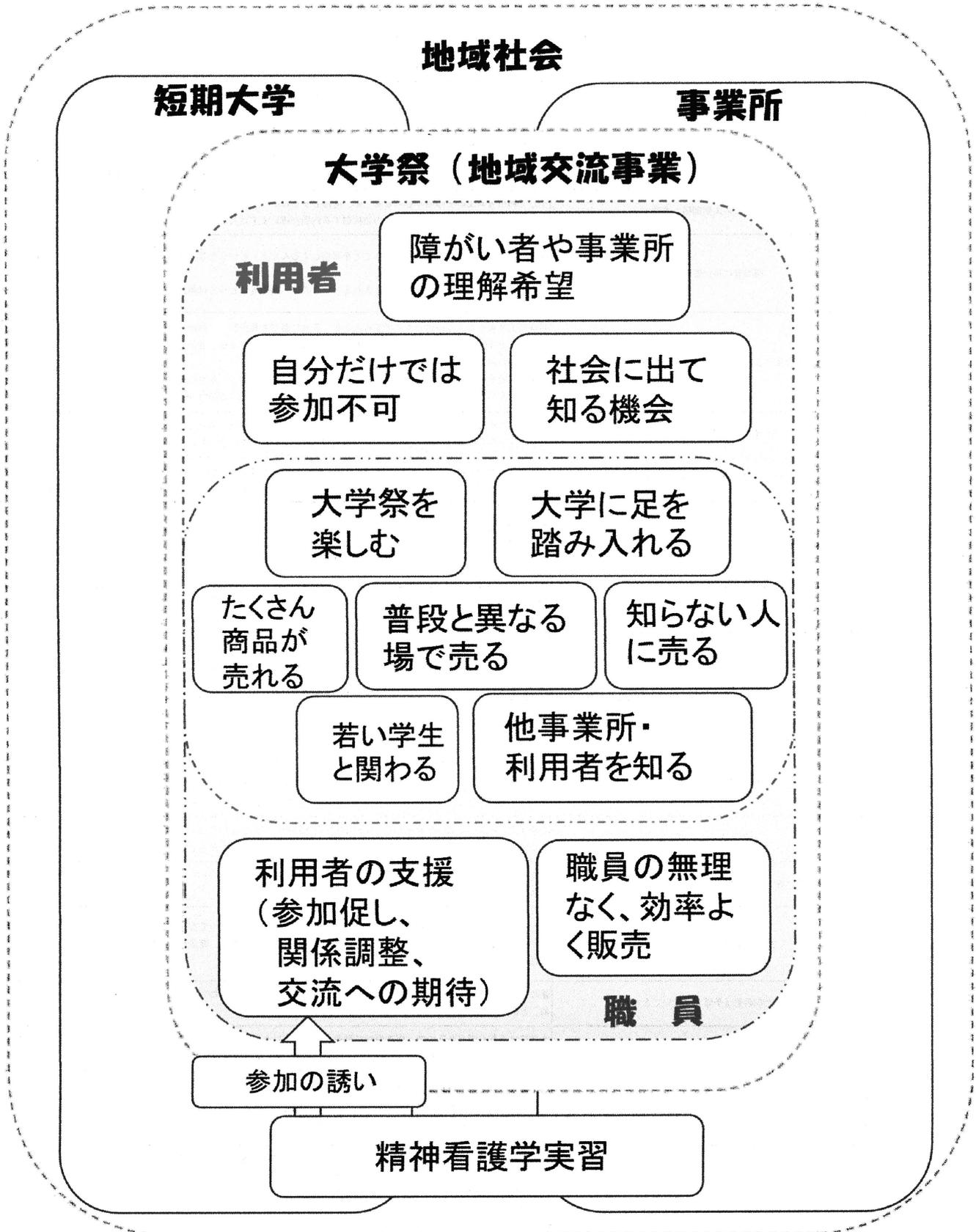


図2. 大学祭に利用者、職員（事業所）が参加する意義の構造

という参加と活動につながったことから、地域交流事業の目的は一定程度果たせたと考える。しかしながら地域交流事業はその目的から、短期大学教員が短期大学からの助成を受け、利用者や事業所職員が販売しやすい環境を柔軟に整えているという前提条件があったことも重要であったと考える。そのことは職員の【大学祭に参加する条件が揃っている】に関係していると考えられるためである。大学祭での販売は、他の販売イベントに比べ参加条件が整っていたことが、職員が大学祭に参加する意義の一つであったと考える。

## 2. 利用者である精神障がい者の地域交流事業への希望

本研究では、精神障がい者は、新しいことや人に対し不安が強く、緊張しやすいという特徴を持ち、意見を汲み取ることが困難であると考え、事業所職員の視点を含めることが、精神障がい者の真意を汲み取ることが補うと考えた。利用者と職員に共通したカテゴリーがあったことから、職員からの意見は精神障がい者の真意を汲み取ることが補うものであったと考えられたが、一方で利用者である精神障がい者にのみで【事業所や精神障がい者を理解して欲しい】が挙げられたことは特筆すべきことであると考えられる。精神障がい者に対しては、否定的ステレオタイプな見方、偏見やスティグマの存在があることが知られている（中村[12]、榎原 他[13]）。近年では地域で精神障がい者が生活することが当たり前になり、精神障がい者への偏見・差別及び啓発活動が進んでいるものの、精神障がい者や精神保健福祉に関する住民の思いには、肯定的なものと否定的な相反する構造があると報告されている（[3] 再掲[14]）ように、地域の中で精神障がい者は、十分に理解されている体験を持っていないことが推察される。

一方で職員からも【学生が利用者との関わりに積極的ではない】と感じ【大学祭は交流の場となって欲しい】との希望が挙げられた。地域交流事業は社会参加の機会となったと考えられたが、職員は機会だけでなく大学祭参加者と利用者の双方向的

な交流を求めていること、利用者では社会参加の機会と同時に、理解されたいという体験を希望していた。以上より、利用者が大学祭で大学生や地域住民と交流することの重要な意義として、地域住民や社会から精神障がい者に対する理解を求めることであると考えられた。

## 3. 障がい者との共生社会の実現に向けた短期大学の地域貢献についての示唆

前述したように、地域交流事業は短期大学からの助成により、利用者にとって活動を促す環境を整えてきた。それは大学祭らしい雰囲気づくりのための装飾、利用者や大学祭への参加者の交流を促す飲料の提供などに用いられた。大学祭は短期大学にとっても地域住民と交流できる数少ない機会である。国は、地域を拠点とする共生社会の実現に向けて、ターゲットを明確にした普及啓発の推進を求めている。そのためには、精神障がいを持つ当事者とのふれあいの機会を持つなど地域単位の活動が重要であると示している（今後の精神保健福祉医療の在り方に関する検討会[15]）が、前述した精神障がい者の地域交流事業への希望からは、示された後、約10年を経ても精神障がい者自身が実感できる共生社会になっているとは言い難い。

地域交流事業の職員が事業所として大学生や地域住民と交流することには【大学祭参加への職員の負担が大きすぎない】ように環境を整えた大学祭で【販売で利益を上げ利用者へ還元する】ことにも意義を感じていると考えられた。就労B型事業所のように精神障がい者の、働く場や活動の場としての地域の受け皿が増えて参加する精神障がい者が増加しても、それが精神保健福祉の世界だけに閉じられたものであっては、精神障がい者が求める理解されることを実感できるような共生社会となることは難しいと考える。何より利用者も職員も大学祭へ【参加するには利用者だけでは難しい】と感じており、大学祭への参加の誘いが参加に対するきっかけとなり、職員の支援がありようやく利用者が大学祭に参加できるという構造に

なっていた。短期大学の地域住民が交流する大学祭という機会に、利用者や事業所が参加しやすい条件を整えることは障がい者との共生社会への第一歩となり得ると考える。

## V. 本研究の限界と課題

本研究は、精神障がい者が大学祭で開催される地域交流事業に参加し、大学生や地域住民と交流することの意義を、精神障がい者と精神障がい者と日常的に関わっている事業所スタッフの双方の視点から明らかにすることを目的とした。大学祭で開催される地域交流事業に2回以上参加した2事業所の利用者3名、職員2名を対象としインタビューしたため、精神障がい者や事業所職員の意見として一般化するには限界がある。本研究で得られた知見をもとに、精神障がい者が希望する障がい者理解を促進するために、地域に開かれた大学として短期大学は大学祭に限らず、精神障がい者との交流の機会を設け、交流を促進するための実践を通して精神障がい者に対する理解の効果を検証していくことが課題であると考ええる。

## VI. 結論

短期大学で開催される地域交流事業に2回以上参加した2つの障害福祉サービス事業所の3名の利用者と2名の職員に大学祭の参加に関する半構造的インタビューを行い、その語りを質的記述的方法により分析した結果、利用者と職員に共通して7カテゴリー、利用者には7カテゴリー、職員には14カテゴリーが抽出された。カテゴリーの関連からは大学祭が利用者、職員の双方にとって、余暇活動、新たな体験への機会、活動範囲や対人関係を拡大し販売出来ること、職員にとっては利用者を支援しながら、普段以上に無理なく販売出来ること、利用者にとっては自分だけでは大学祭への参加が難しいが、大学祭は社会に出てものごとを知る機会と位置付け参加し、障がい者や事業所への理解を希望することが、大学祭に参加し交流する意義であったことが明らかになった。

## 謝辞

本研究を進める上でご協力を頂いた皆様に深く感謝申し上げます。地域交流事業は長橋美榮子元教授（精神看護学）の企画で開始されたものであり、地域精神保健活動に対する情熱に敬意を表す。

なお、地域交流事業は平成29年度～令和元年度SeiyoUSR事業の助成を受け実施、本研究は令和元年度仙台青葉学院短期大学学長裁量研究費（承認番号3110）の助成を受けまとめたものである。また本研究の一部は日本看護科学学会第41回学術集会で発表した。

## 文献

- [1] 内閣府：平成24年度版障害者白書（概要）平成26年6月  
<https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h24hakusho/gaiyou/index.html>（2022年1月20日閲覧）。
- [2] 内閣府：令和3年度版障害者白書（全文）令和3年6月  
<https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r03hakusho/zenbun/pdf/ref2.pdf>（2022年1月20日閲覧）。
- [3] 板山稔，高田絵理子，田中留伊：精神障がい者および精神保健福祉に対する地域住民の思いに関する記術的研究．弘前医療福祉大学紀要．2013；4（1）：25-32.
- [4] 千葉理恵，木戸芳史，宮本有紀，他：精神障害をもつ人とともに地域で心地よく生活するために，地域住民が不足していると感じているもの－東京都民を対象とした調査の質的分析から－．医療と社会．2012；22（2）：127-138.
- [5] 内閣府：平成29年度版障害者白書（全文）平成29年6月  
[https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h29hakusho/zenbun/h1\\_01\\_01\\_02.html](https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h29hakusho/zenbun/h1_01_01_02.html)（2022年1月20日閲覧）。
- [6] 阿部由香，大塚麻揚，藤川剛他：「Liaison

～広げよう！みんなの輪 project」実践報告  
－大学祭での学生教員合同企画による精神  
障害に関する啓蒙活動－. 埼玉県立大学紀  
要. 2003；5：159-164.

- [7] 中村真, 川野健二：精神障がい者に対する  
偏見に関する研究－女子大学生を対象とし  
た実態調査をもとに－. 川村学園女子大学  
研究紀要. 2002；13（1）：137-149.
- [8] グレック美鈴, 麻原きよみ, 横山美江：質  
的記述的研究. よくわかる質的研究の進め  
方・まとめ方(第1版). 医師薬出版株式会社,  
東京, 2007, 54-72.
- [9] 北島謙吾：デイケア通所精神障がい者の社  
会参加の促進要因に関する研究. 三重県立  
看護大学紀要. 2002；6：49-73.
- [10] 服部希恵, 北島謙吾, 森田敏幸：精神障が  
い者の社会機能および日常生活自己管理が  
社会参加に及ぼす影響. 精神保健看護学会  
誌. 2001；10（1）：118-125.
- [11] 厚生労働省：障害福祉分野の最近の動向.  
令和2年2月  
[https://www.mhlw.go.jp/content/  
12401000/000591643.pdf](https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000591643.pdf) (2022年1月20日  
閲覧).
- [12] 中村真：精神障がい者に対する否定的態度  
に関する研究の動向 日本国内における実  
態調査. 川村学園女子大学紀要. 2001;12(1):  
199-212.
- [13] 榊原文, 松田宣子：精神障がい者への偏見・  
差別及び啓発活動に関する先行文献からの  
考察. 神戸大学医保健紀要. 2003；19：59-  
73.
- [14] [3] 再掲.
- [15] 今後の精神保健福祉医療の在り方に関する  
検討会：精神保健福祉の更なる改革に向け  
て. 平成21年9月  
[https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/09/  
dl/s0924-2a.pdf](https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/09/<br/>dl/s0924-2a.pdf) (2022年1月20日閲覧).